杜甫の詩における「亂」「欹」「危」

鈴木修次

一

詩人にとつて、對象が持つ微細なゆらぎ、あるいはある種の不安定さ、それを的確に把握する目が必要なことは、いうまでもない。同時に、對象に接して、ナイーブに感動し、微妙にうちふるえ續ける心、それも當然必要である。またさらには、イメージの世界において、不安定な對象物と、心の顫動とをかみあわせ、相互に觸發させつつ、「ゆらぎ」の世界を構築しうる能力、それがなければならない。杜甫は、そうした「ゆらぎ」を、終始豐かに持ち續けた詩人であつた。その一端を示すものとして、「亂」「欹」「危」などのことばの選擇と、使用とに關する苦心が考えられる。

杜甫はとくに、「亂」という語の使用において、獨特のくふうとあじわいとを示した。そして、杜甫獨自の造語をくふうしたりもした。「亂雲」・「亂水」・「亂藥」・「亂波」・「亂帆」などは、杜甫のオリジナルな用語であつたと見られる。光・雲・水・波・石・花などの事物を、「亂」ということばにおいて説明しようとする杜甫の心理のなかに、あるいは杜甫の創作心理の秘められたなぞのひとつが發見できるかもしれない。以下、具體的な例に卽して考えてみることにする。

杜甫の詩において「亂」の文字を使用するもののうち、いかにも杜甫的な感覺が示されていると考えられるものの例を、杜詩詳註本の順序に從つてぬき出してみる。杜甫的な感覺という基準は、やや恣意的・主觀的であるうらみなしとはしない。しかしたとえば、「世亂」・「心緒亂」・「天下亂」・「朝廷亂」などの場合の「亂」、「亂後」・「亂定」・「亂舞」・「遭亂」・「禍亂」・「喪亂」などの場合の「亂」、あるいは「雜亂」・「散亂」・「錯亂」・「凌亂」・「亂離」などの「亂」は、いず

れも杜甫が使用していることばであるが、そうした用例は、杜甫に限らず一般に用いられている用語であるから、それらは考察の對象から除外し、文學的表現としておもしろいと考えられるものを、とりあげて考えようとする趣旨である。詳註本をとりあげたのは、それが編年による配列をたてまえとしているからで、參考までに、詳註や杜甫年譜にしるされている制作年齢を、わかるものについてはしるすことにする。

1 晚涼看洗馬　森木亂鳴蟬

卷一、「與任城許主簿遊南池」。二十六歳ごろの作とする説、二十九歳の作とする説がある。卷十一、「光祿坂行」にも、「樹枝有鳥亂鳴時、溟色無人獨歸客」という。その詩は五十一歳の作。

2 華亭入翠微　秋日亂清暉

卷一、「重題鄭氏東亭」。三十三歳の作とする説と、四十八歳の作とする説がある。後者の説は、杜甫年譜にいうところであるが、その方がよいと考えられる。

3 野寺垂楊裏　春畦亂水間

卷三、「奉陪鄭駙馬韋曲二首〈其二〉」。四十三歳の作とする説、四十七歳の作とする説がある。卷二〇、「向夕」、五十六歳の作にも、「眺畝孤城外、江村亂水中」という。卷七、「山寺」、「亂石通人過、懸崖置屋牢」の「亂石」は、一本「亂水」に作ることを宋本杜工部集の注記にいう。「亂水」とは、ところかまわずに豁かにみなぎる水を表現しようとしたものであろう。

4 洑流何處入　亂石閉門高

卷三、「崔駙馬山亭宴集」。四十三歳の作。卷七、「山寺」、四十八歳の作に、「亂石通人過、懸崖置屋牢」。卷八、「赤谷」、同じく四十八歳の作に、「亂石無改轍、我車已載脂」。卷十五、「引水」と題する五十五歳の作に、「月峽猩唐雲作頂、亂石崢嶸俗無井」という。「亂石」とは、ごろごろところがつている、あるいは重なりあつている石（岩）を

いう。卷一九、「柴門」、五十六歳の作には、「石亂上雲氣、杉清延日華」という。「清」、一本「青」に作り、「日華」、一本「月華」に作る。

5 地軸爲之翻　百川皆亂流

卷四、「晦日尋崔戡・李封」。四十五歳の作。「亂流」ということばは、後に述べるように、「離騷」や湖霊運の詩に見られる。めちやくちやに水が流れる狀態をいう。

6 亂雲低薄暮　急雪舞廻風

卷四、「對雪」。四十五歳の作。「亂雲」をいうものは、この一例のみ。「雲亂」といういいかたは文選にもあるが、「亂雲」という造語は、杜甫の創意に出るものと見られる（附記參照）。なお、卷十、「朝雨」、五十歳の作には、「涼氣曉蕭蕭、江雲亂眼飄」という。

7 安得健步移遠梅　亂插繁花向晴昊

卷四、「蕪端・薛復筵、簡薛華醉歌。」四十六歳の作。「亂插」、むやみとさすさま。

8 羣雞正亂叫　客至雞鬪爭

卷五、「羌村三首〈其三〉」。四十六歳の作。

9 松悲天水冷　沙亂雪山清

卷五、「奉送郭中丞兼太僕卿充隴右節度使三十韻」。四十六歳の作。

10 鴟梟鳴黃桑　野鼠拱亂穴

卷五、「北征」。四十六歳の作。「亂穴」、あちこちに堀られた穴。「亂穴」をいうもの、この一例のみ。

11 簷雨亂淋幔　山雲低度墻

卷七、「秦州雜詩二十首〈其十八〉」。四十八歳の作。ほかに卷一三、「寄李十四員外布十二韻」、五十三歳の作にも、

「宿陰繁素柰、過雨亂紅蕖」という。「素柰」「紅蕖」、ともに花をいう。

12 稠花亂蘂裏江濱　行步欹危實怕春

卷一〇、「江畔獨步尋花七絶句〈其二〉」。五十歳ごろの作。ほかに卷一三、「絶句六首〈其二〉」、「藹藹花蘂亂、飛飛蜂蝶多」。卷一四、「奉觀嚴鄭公廳事岷山沱江畫圖十韻」、五十三歳の作に、「霏紅洲蘂亂、拂黛石蘿長」という。

13 丁香體柔弱　亂結枝猶墊

卷十、「江頭五詠・丁香」。成都時代、五十一歳の作とされている。

14 引頸嗔船逼　無行亂眼多

卷一二、「舟前小鵝兒」。五十二歳、漢州においての作。卷一七、「朝雨」にも「涼氣曉蕭蕭、江雲亂眼飄」という。

15 寒花隱亂草　宿鳥擇深枝

卷一二、「薄暮」。五十二歳、廣德元年秋、閬州での作。卷一三、「渡江」、五十三歳の作には、「渚花張素錦、汀草亂青袍」という。

16 日晚煙花亂　風生錦繡香

卷一三、「陪王使君、晦日泛江、就黃家亭子二首〈其二〉」。五十三歳、廣德二年正月、閬州での作。卷一七、「白小」に、「入肆銀花亂、傾筐雪片虛」は、花そのものの形容ではないが、なお關連する。卷一三、「寄李十四員外布十二韻」の「宿陰繁素柰、過雨亂紅蕖」も、亂れるのは紅蕖の花である。

17 風起春燈亂　江鳴夜雨懸

卷一五、「船下夔州郭宿、雨濕不得上岸、別王二十判官」。大曆元年春、五十五歳、夔州での作。

18 亂波紛披已打岸　弱雲狼藉不禁風

卷一八、「江雨有懷鄭典設」。大曆二年、五十六歳、夔州瀼西での作。卷一二、「巴西驛亭觀江漲、呈竇使君二首〈其

一〉」、五十一・二歳ごろの作には、「宿雨南江漲、波濤亂遠峯」という。この場合は、波が遠峯をかき亂すのであるが、なお關連する。卷一八、「暮春題瀼西新賃草屋五首〈其一〉」、五十六歳の作にいう「谷虛雲氣薄、波亂日華遲」は、波自體が亂れるのである。

19 六月青稻多　千畦碧泉亂。

卷一九、「行官張望補稻畦水歸」。大曆二年、五十六歳、瀼西での作。

20 卽今螢已亂。　好與鴈同來

卷一九、「舍弟觀歸藍田、迎新婦、送示二首〈其一〉」。大曆二年夏、五十六歳の作。卷一九、「見螢火」にいう「復亂簷前星宿稀」も、螢が亂れるのである。

21 雲石熒熒高葉曙　風江颯颯亂帆秋

卷二〇、「簡吳郎司法」。大曆二年、五十六歳、夔州東屯での作。「亂帆」をいうもの、この一例のみ。ここでいう「亂帆」は、詩意から考えて、風をはらんだ帆かけ舟が、江上のあちこちに點在する狀態をいうものと判斷される。

22 窄轉深啼狖　虛隨亂浴鳧

卷二一、「大曆三年春、白帝城放船、(云云)、將適江陵、漂泊有詩、凡四十韻」。五十七歳の作。「亂浴」、一に「亂落」に作るが、「亂浴」が正しいであろう。あちこちにゆあみする意か。

23 樹蜜早蜂亂。　江泥輕燕斜

卷二二、「入喬口」。大曆四年春、五十八歳の作。蜂が亂れるというとらえ方は、螢が亂れるというとらえ方と同じ。

以上に例示したものは、冒頭に述べたごとく、杜甫の「亂」の使用例のうち、文學的表現としておもしろく感じたものをぬき出したものであるから、これによつて杜甫が、「亂」ということばに、いつごろから、どのような興味を寄せたか

をうんぬんすることは、もちろんできない。しかしながら、四十三歳「亂水」・「亂石」、四十五歳「亂流」・「亂雲」、四十六歳「亂叫」・「亂穴」、成都時代の「亂藥」・「亂結」、五十六歳の「亂波」・「亂帆」などの用語のくふうには、「亂」ということばに對するある執念がうかがえるように思う。

二

杜甫は、文選の語彙をよく利用したにちがいないというのは、吉川幸次郎博士の卓説であるが、文選に示された「亂」字の使用は、實のところ意外に貧弱である。たとえば、雲が亂れるといういい方が、文選には次の三例求められが、「亂雲」という語彙は見られない（斯波六郎博士編、文選索引による）。

其波涌而雲亂（枚乘「七發」）

波涌雲亂（枚乘、「七發」）

風駭雲亂（嵇康、「琴賦」）

文選に、光を亂す、あるいは蝶が亂れるという唯美的表現はあるが、やはり熟語にはならない。

紛虹亂朝日（謝朓、「始出尚書省詩」）

花叢亂數蝶（〃、「和王主簿怨詩」）

「亂」を用いた熟語としては、文選に、「亂流」という次の二例をわずかに見るのみである。

固亂流其鮮終兮（屈原、「離騷」）

亂流趨正絕（謝靈運、「登江中孤嶼詩」）

謝靈運の詩にいう「亂流」は、あるいは杜甫の意識のもとになつているかもしれない。ただし「亂流」ということばは、鮑照・李白の詩においても、後述するごとく用いられている。

文選に限定せずに、廣く六朝詩一般を見わたしたとき、「亂」という語を用いる表現はどうであつたであろうか。六朝

詩全般にわたつて、「亂」字の使用を檢討するということは、ただちにはできないが、杜甫が注意したであろう六朝の詩人、陶淵明・謝靈運・鮑照・謝朓・何遜・陰鏗・庾信の七人の詩人をこころみにとりあげたとき、「亂」をめぐる文學表現のくふうは、やはりかならずしも多くはない。

もし、陶淵明に卽して見たとき、「亂」の語彙としては、わずかに、

父老雜亂言（陶淵明「飲酒二十首〈其十四〉」）

を見るのみである。

謝靈運の「亂流」といういいかたは、たしかにすぐれた表現のくふうであるが、その謝靈運が、別には、

石横水分流（謝靈運、「於南山往北山、經湖中瞻望詩」）

といつているのを見たとき、「亂流」ということばに、特別の愛着の意識はなかつたものとみられる。事實、謝靈運の詩に、ほかに「亂」を用いる語彙を見出すことはできない。

鮑照は、比較的に「亂」の語を好み、それを效果的に使用するところがある。めぼしい例のいくつかを、とりあげてみるならば、たとえば次のごとき用語例を見る。

花木亂平原（鮑照、「代陽春登荆山行」）
懸裝亂水區（〃　「登廬山詩」。「懸裝」は、瀧。）
蓬思亂光髮（〃　「岐陽守風詩」）
涓涓亂江泉（〃　「擬青青陵上陌詩」）
池瀆亂蘋萍（〃　「在江陵歎年傷老詩」）
嚴風亂山起（〃　「冬日詩」）
輝石亂煙虹（〃　「望孤石詩」）

亂流灘大壑（〃　「日落望江、贈荀丞詩」）
滂沱下霖亂（〃　「苦雨詩」）

鮑照の「亂」の用い方には、特殊な感覚が働いているとは考えられるが、しかし「亂」を用いた熟語の語彙は少ない。謝朓については、どうであろうか。謝朓の詩を検討したとき、文選に收載されている詩以外に、次のような例が見られ、その感覚においては、ときに杜甫と共通するものを見るが、やはり「亂」をもつて熟語を作ろうとはしない。

風盪飄鶯亂（謝朓、「登山曲」）
平原亂秋草（〃　「奉和竟陵王同沈右率過劉先生墓」）
翔集亂歸飛（〃　「和蕭中庶直石頭」）
嚴城亂芸草（〃　「奉和隨王殿下十六首〈其五〉」）
庭雪亂如花（〃　「詠竹火籠詩」）

鶯が亂れる、あるいは蝶が亂れる（前掲文選の用例）は、杜甫の詩の、螢が亂れる（20の例）、蜂が亂れる（23の例）と、かようものがある。草が亂れる、花が亂れるというとらえかたは、杜甫においても例があつた（15・16の例）。前掲、文選所收の謝朓の詩に、朝日の光を亂す、「紛虹亂朝日」といういいかたがあつたが、杜甫にも「秋日亂清暉」（2の例）といういいかたがある。美的感覚において、杜甫はたしかに謝朓に似るものをも持つ。

何遜・陰鏗になると、「亂」の使用はきわめて乏しい。わずかに次の例を求めうるのみである。

日中花色亂（何遜、「酬范記室雲詩」）
蟣蠓窓間亂（〃　「苦熱詩」。「蟣蠓」は、「ぬかが」ともいうべき小蟲。）
游魚亂水葉（〃　「贈王左丞僧孺詩」）
茅簷下亂滴（陰鏗、「閒居對雨詩」）

「亂」ということばについて、格別の興趣を示したのは、杜甫が詩人としての力量に對して敬意を拂つていた庾信である。庾信の詩からは、たとえば次の例に示すような、「亂」を用いた熟語例をいくつも見ることができる。

石紋如碎錦　藤苗似亂絲（庾信「奉和趙王遊仙詩」）
螢排亂草出　鴈捨斷蘆飛（〃　「和何儀同講竟述懷詩」）
秋砧調急節　亂杵變新聲（〃　「夜聽擣衣詩」）
沙州聚亂荻　洞口礙橫松（〃　「同會河陽公新造山池、聊得寓目詩」）
連盃勸上馬　亂菓擲行軍（〃　「見遊春人詩」）
雲光偏亂眼　風聲特噤心（〃　「奉答賜酒鵝詩」）
細塵鄣路起　驚花亂眼飄（〃　「詠畫屏風詩二十五首〈其一〉」）
水紋恒獨轉　風花直亂廻（〃　〃　〈其二〉」）
弓衣濕濺水　馬足亂橫波（〃　〃　〈其十五〉」）
霜風亂飄葉　寒水細澄沙（〃　「衞王贈桑落酒奉答詩」）

右の例に見る「亂絲」・「亂草」・「亂杵」・「亂荻」・「亂菓」・「亂眼」・「亂廻」、あるいは「亂」と「波」、「風」、あるいは「葉」と「亂」、これらのうち「亂絲」といういいかたは、從前においてもありうるものであるが、それ以外の「亂」のとらえかたは、六朝詩人のうちきわだつて特異な性格を示している。庾信が「亂」の感覺に、特異な關心を示したそのことの潛在心理を、庾信の立場から論ずることは、おそらく可能であろうが、いまその問題は措く。「亂草」・「亂眼」・「亂波」は、杜甫にも見られるが、庾信のいう「亂杵」・「亂荻」・「亂菓」などの表現は、まことに眼をみはらせるものがある。「亂眼」について、佩文韻府はただちに韓愈の詩例を引くが、その前に、庾信、および杜甫が引かれなければならない。

杜甫は、庾信の「亂」に寄せる關心に驚き、またそこからヒントをうるところがあつたのではないかとわたくしは思う。そして、庾信以上に杜甫は、「亂」による用語のわくを擴めた。杜甫が用いた「亂水」・「亂雲」・「亂挿」・「亂叫」・「亂穴」・「亂藥」・「亂結」・「亂帆」・「亂浴」の例は、庾信にもなく、他の六朝詩人全般に例を徵しても、おそらくは求めがたいであろう。杜甫の「亂」ということばに對する關心と造語のくふうには、杜甫獨自のものがある。杜甫の用語例のうち、「亂流」は謝靈運の詩にすでに例があり、また李白の詩にも例が求められる。また、「亂石」といういいかたは、王維・李白の詩に求められる。こころみに、王維・李白の詩から、「亂」の熟語例を掲げるならば、次の如くである。

聲喧亂石中（王維、「青谿」）
亂石流狀間（李白、「姑熟十詠、牛渚磯」）
簾捲亂峯青（〃　「贈江油尉」）
亂流新安口（〃　「送王屋山人魏萬還王屋」）
亂流若電轉（〃　「至鴨欄驛上白馬磯贈裴侍御」）

（王維、および李白の詩についての用例は、京都大學大學院諸氏による「王維詩索引」、花房英樹氏「李白歌詩索引」を利用させて頂いた。）

佩文韻府は、「亂石」・「亂穴」・「亂草」・「亂藥」・「亂帆」に、まず杜甫の詩例を引く。「亂穴」・「亂草」・「亂藥」に引くのは、杜甫の詩例のみである。「亂草」は、謝朓に「平原亂秋草」・「嚴城亂芸草」とすでにあるので、その語彙の造成が杜甫に始まるということをただちにはいえないが、「亂穴」・「亂藥」・「亂帆」に、まず杜甫の詩例を引く佩文韻府の見解はたしかであるといえる。「亂石」については、王維・李白の例がまず引かれねばなるまい。なお佩文韻府は、「亂雲」・「亂水」・「亂挿」・「亂叫」・「亂浴」の語彙を收錄しない。「亂雲」ということばは、普通に存在しそうな語に一見みえるが、明確な前例が見あたらず（附記參照）、「亂水」とともに、杜甫の造語であると考えてよさそうである。

杜甫はたしかに、「亂」ということばに、生涯にわたつてたえず執着を持ち續け、「亂」による語彙を、特別にくふうするところがあつた。

三

杜甫は、かたむくもの、不安定なもの、くずれそうなものにひかれる性情を持つていたらしい。たとえば「欹」（音「キ」「敧」と同じ）ということばの用い方にも、獨特な味がある。

崩石欹山樹　清漣曳水衣（「重題鄭氏東亭」）

萬壑欹疎林　積陰帶奔濤（「飛仙閣」）

右の二例、對句の對應から考えて、「崩石」や「萬壑」が、「山樹」・「疎林」を、傾斜した姿に生育させているという意で、「欹」ということばの働かせ方は同一である。前者の詩を、杜詩詳註は卷一に掲げ、四十三歳ごろの作と考えるのであるが、その詩の原注に「在新安界」とあり、新安での作である有名な「新安吏」は四十八歳のものであるから、この詩も四十八歳の作と見られる可能性が生まれる。後者の詩、「飛仙閣」は、秦州から同谷に赴く過程の紀行詩の一で、四十八歳の作である。景のとらえ方や、描寫の感覺が共通しているので、二者とも同年の作と考える方がよいであろう。

欹帆側柂入波濤（「最能行」）

欹側風帆滿（「過南嶽入洞庭湖」）

欹斜激浪輸（「大曆三年春、白帝城放船、〈云云〉、將適江陵、漂泊有詩、凡四十韻」）

右の例に見る「欹側」・「欹斜」は、いずれも波に翻弄される船のさまを寫しとろうとするものであるが、この「欹側」・「欹斜」は、杜甫の「亂」の感覺とかようものがある、さればこそ、別の詩では、「亂」と「欹」とを對應させている。

稠花亂蘂裏江濱　行步欹危實怕春

（「江畔獨步尋花七絶句〈其二〉」）

左の例は、對句にはならないが、なお「亂」の感覺と「欹」の感覺とが、微妙に應じあつているであろう。

多溫蚊蚋集　人遠鳧鴨亂。
登頓生曾陰　欹傾出高岸

（「通泉驛、南去通泉縣十五里山水作」）

杜甫の詩において、「欹」ということばの使用例はかならずしも多くはないが、「欹危」・「欹側」・「欹傾」・「欹倒」・「欹斜」などの熟語例があり、それらのいくつかは、杜甫獨自の造語になるのではないかと思われる。

ちなみに佩文韻府を見るならば、「欹側」において庾信の「小園賦」を引いたあとに杜甫の詩例を引く以外は、「欹危」・「欹傾」・「欹倒」・「欹斜」の用例の始めに、すべて杜甫をあげる。

杜甫は、「危」ということばについても、獨自の感覺を發揮する。たとえばいう。

逕危抱塞石　指落曾冰間（「前出塞九首〈其七〉」）
山危一徑盡　岸絶兩壁對（「萬丈潭」）
路危行木杪　身迴宿雲端（「移居公安山館」）

これらの「危」のイメージには、けわしく、きびしい、身がひきしまるような思いがこめられている。

「危」を用いた熟語例も、また見ることができる。

危途中縈盤　仰望垂線縷（「龍門閣」）
且知寬疾肺　不敢恨危塗（「北風」）
秋花危石底　晚景臥鐘邊（「秦州雜詩二十首〈其十二〉」）
擺浪散帙妨　危沙折花當（「次晚州」。ならんで押しよせる浪は、讀書をしようとして帙を散亂させるのをさまたげくずれそうにもりあがつた砂は、岸邊の花を手折ろうとするのにぶつかつてさまたげられる意か。）

中夜江山靜　危樓望北辰（「中夜」）
危階根青冥　曾冰生淅瀝（「白水縣崔少府十九翁高齋三十韻」）
細草微風岸　危檣獨夜舟（「旅夜書懷」）
莫怪啼痕數　危檣逐夜烏（「過南嶽入洞庭湖」）

「危途」・「危塗」といういいかたは、先に掲げた「逕危」・「山危」・「路危」のイメージと同一のものであるから、あらためて補説を要しないが、「危石」・「危沙」のイメージは、これまた獨特のニュアンスを含む。平面のひろがりにおいてとらえるならば、「亂石」「亂沙」というべきところであろうが、その部分をとらえようとして、「危石」・「危沙」といったものかと思われる。この「危」の言語感覚は、「亂」に潜められた言語感覚と共通するものがある。

「危樓」・「危階」・「危檣」ということばは、従前ほとんど疑いをさしはさまずに、ただちに「高樓」・「高階」・「高檣」の同義語として理解されてきているのであるが、杜甫の場合には、これらのことばの裏に、作者の心のおののきが存在すると見なければなるまい。「危樓」・「危檣」ということばは、すでに陰鏗の詩においても用いられている。

跨波連斷岸　接路上危樓（陰鏗、「渡岸橋」）
行舟逗遠樹　渡鳥息危檣（〃　「渡青草湖」）

陰鏗の詩例に見る「危樓」・「危檣」は、ほとんど「高樓」・「高檣」とおきかえてもよく、そのことばの裏に、杜甫の詩例に見るごとき作者の心のおののきを感じなくてもよさそうである（若干はそうした「ゆらぎ」があるにしても）。杜甫の「危樓」・「危檣」は、あるいは陰鏗の詩からことばのヒントを得ているのかも知れないが、杜甫の用語には、杜甫獨自の「ゆらぎ」の感覚が秘められている。杜甫は「危檣」ということばを再度用いているが、いずれも晩年の使用である。この「危檣」は、單にそびえる帆柱ということではなく、不安定なきびしさを秘めた不安な心のとどろきを含むものとして理解しなければならない。

ちなみに佩文韻府を見るならば、「危途」。「危塗」の語彙はとりあげられていず、「危石」には、列子・江總詩・王維詩のあとに杜甫を引き、「危樓」には、水經注・陰鏗詩・張九齢詩・王維詩をあげて杜甫を引かず、「危檣」には、陰鏗の詩を引いたあとに杜甫を引く。なお、「危沙」・「危階」に引くのは、杜甫の詩例のみである。「亂」・「欹」の語彙の場合と同様、「危」においても、杜甫獨自の造語をくふうするところがあつたと考えてよかろう。

四

「亂」・「欹」・「危」などのことばに興趣を寄せる心理、それをどのように理解したらよいのであろうか。「美は亂調にあり」といつた意識とは、おそらく同じでないであろう。それは思うに、杜甫自身の、詩人としての心のときめき、心の「ゆらぎ」が微妙に波打つて、對象を「亂」・「欹」・「危」といつた形容で説明せざるをえなかつたのであろう。「亂」・「欹」・「危」で説明されるものは、對象が安定さを缺いていることを示すばかりではなく、詩人の心自體の、緊張にともなう動揺、作者の心の「ゆれ」や「ゆらぎ」をも示すものとして考えなければならない。

これらのことばは、かならずしもある時期にかたまつて現われるというものではない。杜甫の一生をつらぬいて、たえずひかえめに、用いられ續けているものである。その用いられ方は、表面だつて頻用されないだけに、ある種の押さえられた執念を感ずる。論語のことば、「怪・力・亂・神を語らず」を、儒者であろうとした杜甫が心得ぬはずはない。心得てはいるが、なお「亂」に興趣を寄せざるをえないのが、儒者であろうとする拘束からはみ出た詩人の心である。杜甫は實のところ「神」についても惹かれるところがあり、「神」ということばの用い方にも、獨特の思いがこめられているように考えられるが、いまはこの問題について論ずることを避ける。

「怪・力・亂・神」を語らぬのをたてまえとする儒者であろうとしつつ、反面、「亂」や「神」(場合によつては「怪」にすらも)に惹かれ續けるそこにこそ、詩人杜甫のデモーニッシュな、そしてたくましい詩精神が息づいているのだ、といえるのではないか。詩人としての杜甫の偉大さと魔性とをよく承知していた韓愈は、杜甫を顯彰するその詩の中で、

「百怪、我が腸に入らしめん」（調張籍）とうめいた。そのことばは、杜甫の魔性を知るがゆえの、韓愈のうめきであったとすることができよう。

（昭和四七・二・二〇）（本學助教授）

〔附記〕　詳註に、「對雪」の詩の「亂雲低薄暮」に注して、王筠の詩に「連山卷亂雲」とあるという。王筠は梁の人、『古詩紀』に引く「望夕霽」と題する詩に、「連山卷亂雲、長林息衆籟」とある。しかしながら『藝文類聚』巻二、天部下、霽に引く王筠の詩は、「連山卷族雲」に作り、「族」の方が「衆」により密接に對應する。したがつて、「亂雲」の語彙の源に王筠の詩をただちに考えることは危險であるとしなければならない。